

2020年度

三重大学 人文学部法律経済学科

## 特殊講義 「協同組合論」



<第14回(ZOOM)>

### 「協同組合間協同について」

前田 健喜／日本協同組合連携機構 協同組合連携部長

第14回(1月25日): 受講46名(市民開放授業一般受講者等を含む)

協同組合を一言でいうと人に基盤を置く組織。組合員が創る。参加する。1人一票を持つ。人に基盤を置くがゆえに、組合員の特定のニーズから始まり暮らし全般、地域社会全体、さらに次世代へと全面化していく特徴がある。協同組合間協同は、事業と事業の協同からさらに各協同組合の事業の共通基盤たる地域づくりにおける協同へ、組織間の連携から組合員や住民を中心においた協同へと向かう方向がある。私たちの営みが瞬間瞬間に次の社会を創っている。私たちが参加と協同で社会を変えていく可能性も持っている。

#### 【第14回／講義の要旨】

- ・「産直」は、生協と農漁協との農水産物の取引という協同組合間協同の一つの形。1960年代に適正な価格で安全な食べ物を求める消費者運動の中から生まれた。環境にやさしく新鮮で、安全で、おいしい食べ物を買いたい消費者のニーズ、安全な農産物を供給したいという生産者のニーズ、お互いが交流したいという願いに立脚している。
- ・1世帯当たり所得は1994年以降減少傾向にある。特に、母子世帯で低く全世帯平均の半分以下である。生活が苦しいと感じる人の割合は1992年から増加傾向にある。その割合は2013年で60%にのぼる。母子世帯では85%である。
- ・高齢化に伴うさまざまな問題がある。男性高齢者の孤立の問題も指摘されている。単身世帯は着実に増加している。近所付き合いの程度は継続して縮小している。つながりの希薄化が進行し、協同(助け合い)の力は弱まっている。
- ・1990年代以降、貧困化、格差拡大、少子高齢化、地方における過疎化、生活インフラの維持の困難といった問題が起こってきた。これらの問題は、「持続可能な地域社会づくり」という課題を提起した。まさにSDGsの課題そのものである。この課題を解決するために、協同組合間の協同、さらにそれを越えた幅広い協同が求められている。
- ・住民主体の持続可能な地域づくりが生まれている。持続可能な地域づくりにおいて、組合員・住民主体の動きを協同組合が連携して応援していく形が生まれてきている。
- ・今後の協同組合間協同は、事業間の協同からさらに事業の基盤たる地域づくりにおける協同へ、組織間の協同から組合員や住民の主体的動きを中心にそれを支援する協同へ、さらに、協同組合間の協同からそれを越えた協同へ、という方向がある。
- ・誰もが生存について心配することなく、尊重され、力を発揮し、認められ、幸せに生きられる社会を創っていくために、協同組合の仕組みを活かすことができる。

#### 第14回講義／受講生のレポート（抜粋）

- 自分の中のこれまでのイメージとしては、人々が生まれ、生活していく中で国や都道府県、あるいは市町村などの公的な機関の援助や企業などの私的な機関のサービスなどによって暮らしを支えられているという考えを持っていた。この協同組合論の講義を学んでいく中で、国民一人ひとりが協力し自らの力で助け合いながらそれぞれの地域で暮らしていくことの重要性に気がついた。
- 地域における協同組合間連携の取り組みは、地域に寄り添った活動を行なっている協同組合でしかできないことだと思いました。内容も、それぞれの地域特有の問題や課題について、それぞれのやり方で解決しており、とても良い活動だと感じました。現在コロナ禍で子どもからお年寄りまで地域との接点が少なくなり、孤立しやすくなっているのが協同組合の活動の重要性を感じることができました。そして、協同組合は時代の変化に対応し、地域や住民を支えることができる唯一の存在だと思いました。
- 今回の講義で、協同組合は組合員主体の行動がこれからの時代大切になってくるということを知り、協同組合は組合員や地域の人達の暮らしを豊かにすることを目的の1つとしていることから、組合員が課題と提起して、その課題を協同組合に任せるのではなく、組合員自身が活動に参加したり、活動を始めたりすることによって、従来よりも、より課題ややるべきことが具体的になり、より細かい部分まで対策することができるようになると感じました。このことより、組合員が個々でも活動しやすいような仕組みを作ることなどが大切になってくるのではないかと考えました。
- 協同組合間協同の事例では、相互に協力し合うことで、一丸となって地域振興へと取り組むことができ、より暮らしやすい地域社会を作り続けることができると感じた。また、農林水産業における地域振興だけではなく、組合が協同して地域住民の困りごとについて対処する取り組みや、高齢者や子供の交流の場を設けるといったような活動をするなど、幅広く協同して行われていることが分かった。このように住民主体の地域づくりが生まれているが、将来的にも、住民ひとりひとりが助け合いの精神を持ち、社会をよりよくしたいと強く思うことが大切であると思った。
- 協同組合の組合員さんたちの応援する姿が結果としてつながるといのがこれからの協同組合となり、事業を繋げる地盤作りを今はしているということを知り、組合員になるというひとつの選択を意識した。
- 協同組合の課題としてあげられる協同の力の弱まりはこのコロナ禍によって人とのつながりをなかなか持てない現状から、持続可能な地域づくりのために向き合うべき問題であると感ぜられることが多々感ぜられ、今回みんなで生き延びていくことと言葉を添えられており、とても重要な案件であると感じられた。
- 協同組合間や地域間の協力が必要だということは、今までの講義の中で理解していたが、どのような流れで協同組合間協同が必要だと考えられるようになったのか、また協同組合間協同の具体的な事業が今回の講義でよくわかった。今回の講義で説明された協同組合間協同の具体的な事業では、本当に多種多様な協同組合が協力して地域の問題解決に取り組んでいて、他の協同組合の存在があったからこそできたことも多かったように感じた。特に私の中で印象的だったのは、JA愛知東女性部「やなマルシェ」で、初めは5人という小さな規模での行動が、いろんな人の共感を集めて多くの協同組合や地域の人を巻き込んでいったという部分に感動した。また、今回の講義の中で、「地域つながりセンター」という存在を初めて知った。この団体は、地域の団体との連携を図り、そこから生まれた主体的な取り組みを支援することを目的として作られた。このようなプラットフォームとなる団体があるのとないのでは、協同組合間協同のやりやすさが全然違ってくると思った。

- ・協同組合間協同の事例の一つ、兵庫県の売れなくなったスーパーが閉店する姿を目の当たりにしたときの市民の気持ちの説明がなるほどと感じた。自分達が商品を買わないと、移動店舗も同じように潰れてしまう可能性があるという市民は思い、自分達が移動店舗を「支えよう」という意識を持つようになった。身近に起こると何とかしなければという焦りから、地域の活動が生まれるという良い事例だと思った。倒産してからではなくても、自分達の地域を守るという意識を芽生えさせなければならないと思う。
- ・1世帯当たりの所得減少や高齢化、社会的孤立など、様々な問題がある中でも日本社会は「個」へと向かう流れが進んできている。東京都沼島市の自治会加入の状況を見ても9年で7.6%減っており、繁栄指数のチャートでは他と比べて社会的資本の順位が低くなっている。所得が減ったり高齢になったりしているような状況だからこそ、本来は協同で助け合うようなことが必要であるのではないかと感じた。高齢化や過疎化など地域社会自体の存続が問われているような状況なので、協同組合の活動としては地域の間をつなぐことを回復することや助け合いなどを推進することが重要になっていくと思った。協同組合間活動といっても、漁協や農協など他の協同組合と連携することは難しいと思っていたのでたくさんの事例が紹介されていたことに驚いた。持続可能な地域づくりを行っていくためには、協同組合が主体として動いていくのではなく、組合員や住民が主体として動くことをサポートするような形の協同を行っていくことが有効であると感じた。協同組合の取り組みとしても、事業自体ただ行っていくのではなく、その活動をする地域社会の存続に向けて取り組んでいくことも今後は必要になっていくと感じた。
- ・1960年代に、産直という協同組合間協同の方法の一つがとられたが、これは現在でも消費者のニーズに即したものであると感じた。安全な食べ物を適正価格で提供することが大きく影響しているが、特に、産直三原則が重要であると私は考えた。1つめの「生産者と生産者が明確であること」は、昨日のゼミ活動で訪れた茶農家さんが言っていたことと同じであった。ネームバリューの高い大企業の名前を記せば売れるという時代は終わり、誰がどこで作っているかがわかることが現在は重視される。食品偽装などによって商品の本質が問われ、現在では多少高くても、明確なものを消費者は購入する傾向にある。3つめの「組合員と生産者が交流できる」ことも、意見交流ができる良い機会である。この原則は必要なものであると感じた。住民主体の持続可能な地域づくりが現在は生まれてきているという話があったが、協同組合はその活動の中心（協同組合間協同）ではなく、あくまで支援（手助けする）側に転身することが、これからの地域社会に求められる協同組合の在りかたであると感じた。コミュニティの中心にプラットフォームがあり、そのプラットフォームから住民や協同組合などのあらゆる方向へと矢印（意見や交流の場）が伸びている状態が理想であると思う。
- ・今日の講義でJCAがどのような活動をしており、社会でどのような役割を果たしているかということを知りましたが、さまざまな協同組合がある中でそれらが本来の活躍をするためにはJCAという存在が必要不可欠だと感じました。その理由は、今日の話の中にもあったように、近年、特にひとり親世帯での貧困の深刻化や人口減少、高齢化といった日本全体が抱える課題が多くなっており、このような課題を解決するためには、協同組合といった小さな枠組みだけでなく多くの組合の力が必要であり、その連携が重要になると思ったからです。また、JCAの使命ともしている持続可能な地域・仕事づくりのためにも協同組合間協同は必要であり、新型コロナウイルスの影響でつながりが希薄になりがちですが、今後も協同組合やその他の関連する組織との協力活動を通して課題解決をしていくべきだと改めて感じました。

以上